

川柳 さいたま



麦わら

平成29年(2017年)

11月号 (No.696)

日川協加盟

巻頭言

披講とくしん

願法みつる

川柳大会選者による披講に、各様な批評のある選者を耳にし日にもする。また、選者の顔触れが常連化して、違和感やときには倦怠感を覚えるときがある。中には、名ばかり高く、聴くに堪えない披講の選者も居る。大会参加者は、披講の一句一句を真剣に受けとめようとしている。披講の巧拙とともに都度の新鮮味、換言すれば人間味にも、勝手な批判をするものである。

この時の選者は、料金を払って観入る聞き入る役者や芸人の舞台姿に通じている。それも一人話芸の舞台で、彼らは、話術において存在性を示そうとする。世に出る、沈むが常態化する中、名前に溺れたタラタラ芸の者も居る。そんな彼らの対観客の全人格発露が、川柳大会選者の有り様にオーバーラップしてくる。

披講は貴重な時間と空間を使ったライブ劇場である。披講では、聴衆の目と耳と心に訴えなければならぬ。うつむいたまま句箋を棒読みするのは失礼である。

披講は和を以て貴しとする場である。真剣な披講ならば、多少の失敗も和の素材である。マンネリな披講では、折角の選句集を味気ないものにしてしまう。

披講は落語の舞台にも似る。マンネリ化した真打級よりも、気鋭の二ツ目や前座が座を和ませてくれる。

日日是好

願法みつる

常識に中道はない右ひだり

林檎の実うっかり落ちただけのこと

地の底のズレを哲学して遊ぶ

泣かれても困るワタシは棺の中

ピンキリの振り子にゼロの通過点